

シナネン賞

## 大きくてたくましい僕の大好きなお母さん

山梨県 山梨市立日下部小学校 五年

小平 守莉

「この木は何百年もここにいてみんなを見守ってくれているんだね。」じいじの家の近くの神社の杉の木を見上げながらお父さんがそう言った。「うわー、太い幹だね。」僕の手では抱えきれない程、太くてたくましい幹に僕は抱きついたんだ。「まるでお母さんみたいだ。」僕はその太い幹に抱きつきながらそう思ったんだ。

僕のお母さんはかなり大きい。体も声も態度もすごく大きい。幼稚園の頃、その事をひやかした子がいた。「しゅりのお母さん、デープ。」って、僕はくやしかったんだ。だって、大好きなお母さんの事をバカにされても言い返す言葉が見つからなかったからだ。でも、お父さんが僕に言ったんだ。「お父さんはお母さんの大きな心も声もみんなひつくるめて好きなんだ。しゅりもそうだろう。」って、僕は大きな声で、「うん！。」って言ったんだ。

今はからかわれても平気なんだ。「いいだろう。お前のお母さんの二人分なんだ。」そう言うたいいていの友達が大笑いする。

授業参観、僕はお母さんがどこにいても見つけられるんだ。だって、お母さんからは僕の事が好き好きオーラがでているから、僕は授業中でもついつい手を振ってしまうんだ。だから決まってお母さんに怒られるんだ。「ちゃんと授業に集中しなさい。」って。きつと僕からもお母さんの事が好き好きオーラが出ているんだらうな。

体力なしの根性無しの僕はすぐにあきらめたり、投げ出したりする。でも、そんな時はきまってお母さんが大声をはりあげて僕を叱りとばす。「男だらう！ちゃんとしろ!!」って。だから、僕はがんばれるんだ。そのくせ、僕にピンチがおとずれると必ず助けてくれるんだ。さ骨を骨折した時も、首の手術をした時も、お母さんはずっと僕を助けてくれたんだ。

「この木、お母さんみただね。」お父さんに言うと、お父さんは笑いながら「本当だ。いつもしゅりの事を見守ってる所も、大きい所もそっくりだね。」と言ったんだ。「うん。本当にそっくりだね。」お父さんと僕は杉の木を見上げながら大声で笑ったんだ。だって杉の木が急にお母さんに見えたんだ。僕の大好きな太くてたくましくて大きくて強くて優しいお母さんに。